

上林園翻經館沙門彦琮の漢訳論

齊 藤 隆 信

はじめに

隋の仏教界は、三大法師や六大徳、二十大徳などの学僧を輩出した。そして、彼らと比肩しうる功労者をあげるなら、その筆頭は彦琮（557–610）である。北斉では文林館の賢者と交誼を結び、北周では通道観学士となり、隋では文帝や煬帝と通じ、長安の大興善寺と洛陽の上林園翻經館において漢訳に参画した。その足跡をたどれば、北朝末から隋にいたる仏教界の縮図を実見できるほどである。ところが、これまでその功績が顕彰されることはなかった。おそらく、それは隋唐の宗派仏教（学派仏教）の系譜にその名が嵌入されなかったためである。数多くの著作がありながら、そのほとんどが霧散してしまった事実は、その学系を継承する者が現れなかったことを示唆する。本稿では、彦琮の業績のなかで、『弁正論』をとりあげ、その漢訳論とそこに帰着する背景を解明する¹⁾。

1. 漢訳への参画

『続高僧伝』の彦琮伝には「凡そ前後の訳經、合して二十三部百許卷なり」として、彦琮が手がけた漢訳の部卷数が示されている。また開皇 3（583）年の 27 歳に「西域の經至り、即ち勅して翻譯せしむ」、開皇 12（592）年の 36 歳では「勅召せられ京に入り、復た翻譯を掌る」とあるように、若くして漢訳に参画していた。しかし、那連提耶舎、毘尼多流支の伝では、わずかに經序の撰述のみにとどまっており、闍那崛多伝には「沙門明穆と彦琮、重ねて梵本に対し、再審し覆勘して文義を整理す」（T50. 434b）、そして達磨笈多伝にも「沙門彦琮あり、内外に通照し、華梵並な聞く。伝訳に預り参じ、偏に提誘を承く」（T50. 435c）、北周道安伝の付伝宝貴伝にも「また崛多三藏を請いて銀主陀羅尼及び属累品を訳さしめ、之を以て部を成ず。沙門彦琮、重ねて梵本を覆す」（T50. 630b）、そして彦琮作『合部金光明經』序文では、自ら「通梵沙門の日嚴寺釈彦琮校練す」（T16. 359c）と述

べている。要するに彦琮は訳主となった実績はなく、梵漢両テキストの対校や再三の議論により訳文を整理し、また製序を担っていたことになる²⁾。

2. 漢訳論の成立背景

これまで彦琮の漢訳論をあつかう報告にあつては、みなその八備の内容に拘泥するだけで、そこに帰着する前提が論及されることはなかった。ここでは、その前提を以下の8項目にわけて瞥見する。これによって、その漢訳論が、どのような条件のもとに組成されたのかが明確になるからである。

①家訓としての梵語学 彦琮伝の付伝には、彦琮の甥で後に弟子となった行矩(?-627)を紹介して、「矩は少くして琮に随いて学び葉経を諮訓す。東西の両館にて並な翻訳に参ず」(439c)とあり、また『大唐内典録』5では、「矩は即ち彦琮の猶子なり。然るに家風の梵学を以ての故に此を任ず」(T55.280b)と記している。二人の出自は、「世に衣冠と号し、門は甲族と称す」と激賞される趙郡（河北省の石家庄市と邢台市をまたぐ地域）の名門李一族であり、『北齊書』『北史』『隋書』『旧唐書』『新唐書』の列伝には、一門の多くが名声をほしいままにしている。家風として梵学を修めたということは、李一族において梵語の修学が家訓とされていたことになる。つまり、彦琮も行矩も出家前から梵語に親しんでおり、さらに前掲の達磨笈多伝の「伝訳に預り参じ偏えに提誘を承く」からして、達磨笈多の漢訳現場において、笈多から梵語の教誨を受けていたことになる。

②梵語原典の伝来 北朝から隋にかけて長安や洛陽に数多くの梵語原典がもたらされ収蔵されていたことは以下の記事から確認できる。那連提耶舎伝の「天保七(556)年、京鄴に届る。……是により文宣の礼遇隆重にして天平寺の中に安置せしむ。請いて経を翻ぜしむ。三蔵殿内の梵本、千有余夾なり」(432c)や、「開皇の始(581)、梵経遥かに応じ、ここに璽書を降し、来たりて弘訳せんことを請う」(433a)、また闍那崛多伝の「武平六(575)年、同行と相い結んで経を西域に採り、往返すること七載、東帰を事とするに、凡そ梵本を獲ること二百六十部なり」(434a)、さらに彦琮伝にも「其の年(583)、西域の経至る。すなわち勅して翻訳せしむ」(437a)、「大業二(602)年……新たに林邑(チャンパ国)を平らげ、獲る所の仏経、合して五百六十四夾一千三百五十余部、並な昆崙書³⁾と多梨樹葉なり。勅あり館に送らしむ」(437c)とある。

③梵語原典の読誦 長安大興善寺にはインド西域の貝葉原本があり、洛陽翻經館にはチャンパ国で摂取した昆崙書と多梨樹葉が移管されていたので、彦琮は容

易に原典を入手し読誦できる環境にあった。「琮乃ち専ら葉典を尋ね、日に誦すること万言。大品・法華・維摩・楞伽・撰論・十地等、みな親しく梵書を伝え受持誦読す。毎日闇閱して、要ず周して乃ち止む」(437a)とあり、また「晩に誦する所の梵經四千余偈十三万言を以て、七日に一遍、用て常業と為す」(438a)とあるように、晩年には、洛陽翻經館において、四千余偈十三万言の梵經を7日間かけて読みきり、やはり日課として繰り返していたのである。

④インドへの関心 彦琮のインドへの関心は、その撰述書にもあらわれている。彦琮は長安大興善寺に留錫した達摩笈多の漢訳に参じ、達摩笈多が披陳したインド西域の情報を『達摩笈多伝』にまとめるが、そこに収まりきれない情報を、別に『大隋西国伝』（『西域玄志』、『西域伝』）一部十篇を著わして詳述した。さらに「勅してまた裴矩をして琮と共に天竺記を修續せしむ。文義は詳洽にして条貫に儀あり」とあることから、605年より610年の間に少なくとも4度河西地方に派遣され、『隋西域図記』3巻を編撰していた裴矩(557-627)と『天竺記』を共編している。ほかにも『那連提耶舍伝』をまとめたことも、彦琮のインドへの関心の高さを示すものといえる。

⑤梵語訳 王舎城の沙門（おそらく『続高僧伝』26の中天竺摩竭提国闍提斯那）が長安に入り、仁寿2(602)年に帰国するに際し、『舍利瑞図經』及び『国家祥瑞録』を求めたので、文帝は彦琮に梵語訳を命じ、十巻本として梵訳させ、西域諸国にも贈っている。この両文献について手がかりはないが、事実とすれば漢訳・梵訳ともに担うだけの条件を具えていたということになる。

⑥通梵沙門 彦琮は『合部金光明經序』において、「通梵沙門の日嚴寺釈彦琮校練す」(T16.359c)と自称する。また隋がチャンパ(南ヴェトナム)を制圧して獲得したテキストの中から達磨笈多が『縁生論』『縁生經』を漢訳し、その序文に「琮法師は經論に博通し、兼ねて梵文を善くす」とあり、また闍那崛多伝に「沙門の彦琮あり。内外に通照して華梵並びに聞く」(535c)とも記されるように、その梵語知識は自他ともに認めるところであった。

⑦梵語仏典の重視(胡語と峻別)、梵僧への崇敬 彦琮は、釈道安の五失本三不易に敬意を表しつつも、道安が「胡」「胡語」「胡經」と表記するだけで、「梵」についてコメントしていない不備を、「胡はもと雜戎の胤、梵はこれ真聖の苗なり。根はすでに懸に殊なり、理はあい濫ることなきに、諳悉を善くせず、多く雷同を致す。胡貌あるを見ては即ち梵種という。実にこれ梵人なるも、漫りに胡族をいい、真偽を分かたずことなし。良に哀れむべきかな。梵を語ること訛といえども、

胡に比すればなお別つ。改めて梵学を為さば、胡に非ずと知る」(438b)と指摘する。また、賛寧の『宋高僧伝』3に示される「六例」(723b)の第2「胡語梵語」や、法雲『翻訳名義集』には、彦琮がはじめて梵語と胡語を峻別していたと述べている。それと同じように、「空しく経葉を覩ては、敬仰を興することなく、総じて梵僧を見ては、倒に侮慢を生ず。本を退け末を追うは、ああ笑うべきか。」(439b)として、インド僧に対しては敬意をもって接すべき態度を提唱する。

⑧梵語学習法 「在家者は親に孝順すべき道理があつて孝順しているが、出家者は梵語を学ぶべき道理がありながら学ぼうとしない。もし、梵語を学習するならば、鸚鵡が人のことばをまねるように、邯鄲の人の歩き方をまねるように、くりかえして学ぶべきである。一字づつを丁寧読みこめば、古今の知識が増し、数年後には確実なものとなる。釈迦の法を伝える原典を得て、その形態や句式を熟知し研鑽すれば、理解に滞ることはない。それは難しいことではない。たとえ難しくとも、学ぶ姿勢を堅持すべきである」という。

以上、8項目にわけた上で彦琮の漢訳論組成の条件について瞥見した。要するに、出家前から家風として梵語を学び、梵語知識は自他ともに認めるところとなり、原典のまま日課読誦し、訳経事業にも参画し、梵語訳をも手がけ、出家者の梵語修学を強く推進する立場であったということである。

3. 彦琮の漢訳論

彦琮は、中国僧がみな梵語を学ぶことによって、翻訳の労苦がなくなり、また訳文や内容に対する種々の疑惑も解消されるとし(438c)、梵語原典から直接学びとる姿勢を理想としたので、漢訳する必要はないという(439b)。彦琮本人にとって、漢訳とは不本意で余計な作業であった。しかし、現実的には言語転換なくして教線の拡張はありえず、そのためには、やはり漢訳が求められてくることも承知している。したがって、いかに漢訳するかが次の問題となってきた。ここに彦琮独自の漢訳論が展開される。

彦琮はまず十条を提起するが、その一々の名称(字声、句韻、問答、名義、経論、歌頌、呪功、品題、專業、異本)のみが示され、道宣は「広文如論(詳しい内容は『弁正論』の本文を見よ)」として、その解説を省いている。ただ、名称からして漢訳された仏典の書誌や分類などを示した法規であったと推察される(438c)。また、彦琮は文と質においては、「思うに、翻訳は朴訥を貴として道理をそのままに伝え、巧みな修飾によって本義に背いてはならない。たとえ直訳で堅い訳文であったと

(34)

上林園翻經館沙門彦琮の漢訳論（齊 藤）

しても、それを嫌悪し怪しんではない。（意者寧貴樸而近理，不用巧而背源。儻見淳質，請勿嫌怪）」と述べてあくまでも質の立場を堅持する（438c-439a）。また訳文を修飾してはならないことに関しても、「ひとたび漢訳されてしまうと、中華の文章論の拘束をうけて美しく飾り立てられ、原意から乖離してしまう。ところが、インドで大切に守られているのは内容そのものである（然而東夏所貴，文頌為先。中天師表，梵旨為本）」や、「翻訳の作業にあっては、余計なことを加えてはならない。經典の原意を変えてはならないのだから、賢者に任せて常に訳文の品評を心にかけ、虚妄な分別を恥じつつ、しっかりと漢訳すべきである（宣訳之業，未可加也。經不容易，理藉名賢，常思品藻，終慚水鏡，兼而取之）」と述べている。

次に翻訳の道理として、それに携わる者は、以下の八項目を兼備すべきであると述べる。ここに、彦琮独自の漢訳論としての八備が示されてくる。

誠心愛法	志願益人	不憚久時	其備一也
將踐覺場	先牢戒足	不染譏惡	其備二也
筌曉三藏	義貫兩乘	不苦閤滯	其備三也
旁涉墳史	工綴典詞	不過魯拙	其備四也
襟抱平恕	器量虛融	不好專執	其備五也
沈於道術	澹於名利	不欲高銜	其備六也
要識梵言	乃閑正訳	不墜彼学	其備七也
薄閱蒼雅	粗諳篆隸	不昧此文	其備八也
八者備矣	方是得人	三業必長	其風靡絶

(1)心から仏法を愛好し、他人の利益となることを行い、漢訳に費やす時間を惜しまない。(2)漢訳する仏寺に入る際には、まずは戒をかたく持ち、世間の誹謗や悪事を持ちこまない。(3)経律論の三蔵に詳しく、大乘と小乗の教えにも通じて、およそ教理において知らないことがない。(4)中国の古書や史書の知識があり、また文学方面の才知も具えており、文章表現も適正で誤ることがない。(5)寛容で慈しみがあふれ、公平無私でわだかまりはなく、自分勝手な偏ったことに拘泥しない。(6)仏教などの学問を研鑽しながらも、その名声に関心はない。(7)梵語に精通し、それを正しく漢訳する方法を学び、梵語の文法や体裁に拘束されることがない。(8)中国の文字学である蒼雅（蒼頡篇と爾雅）の字書や、篆隸（篆書と隸書）の字体をおおよそ学び、その方面に詳しい。

この八備のうち、(1)(2)(5)(6)は訳者たる者の人格的な条件であり、(3)(4)(7)(8)は内外典や言語学といった知的条件である。

ところで、道安や玄奘の策定した漢訳上の基準は、漢訳の現場において、その

まま運用することが可能な法規であり、実際の漢訳技術論に他ならない。また賛寧の六例は、梵胡漢それぞれの言語的な特質と訳文について、各例を四句分別して対照的に示した「六」種の実「例」であって、それぞれの対照項目の是非や真偽を問題にするものではない。一方、この彦琮の八備は、翻訳の技術論でもなければ、また語文の実例を示したものでもない。これは、翻訳にとりくむ上で、漢訳者が心がける態度・姿勢を示したものである。つまり、漢訳者としてあるべき品格・教養・資質といった必要条件についてまとめたものといえる。漢訳の技術論に対しては、いわば精神論・理想論ともいえる。

『弁正論』の最後の一段は、あえて儒教倫理観の立場から、現実の仏教を批判するとともに、その後半では仏教界に警鐘をならしている。

儒教倫理の孝道の始終は治家治国である。……僧侶は鬚髪を剃除し、世俗の訓戒に従わず、袈裟や身に着け鉢を持ち、座したままで僧名をもらい、それを道理だと錯覚している。またインドの仏典を学んでいるが、逆に非法を受け入れている始末だ。仏陀を崇拝して依りどころとしながらも、その語源 buddha の字義に無関心であり、梵語原典に敬意はなく、インドの僧侶を軽蔑している。こうした本末転倒のありさまは、まったくのお笑いだ。末法になろうとする今、この風潮が継承されることは悲しいことだ。（若夫孝始孝終，治家治国……奚仮落髮翦鬚，苦違俗訓，持衣捧盂，頓改世儀，坐受僧号，詳謂是理。遙学梵章，寧容非法。崇仏為主，羞討仏字之源，紹釈為宗，恥尋釈語之趣。空觀經葉，弗興敬仰，総見梵僧，倒生侮慢。退本追末，吁可笑乎。像運將窮，斯法見統，用茲紹繼，誠可悲夫。）

彦琮の憂慮は、漢訳だけではなく、三宝のすべてを、いかに中華において正しく存続させるかという点にあった。したがって、「漢訳否定論者」でもなく、また梁啓超が言うような「漢訳無益論者」でもない。ただ漢訳者の意識改革を提起したのであった。

おわりに

朱士行や道安は、同本異訳の漢文テキストを比較検証することにより、經典を立体的にとらえて仏意の把握につとめようとした。しかし、彦琮にはそのような発想はなく、梵語原典そのものから仏意を汲みとろうとした。父母に孝養することが世間の道理であるように、出家者が梵語に親しみ学ぶことは当然のことだという。よって、漢訳に消極的な態度であったことは確実である。しかし、釈迦の法をあまねく布くためには漢訳は必須であることも自覚している。そこに彦琮独自の漢訳論が展開してくる。一つは、「質」であって「文」であってはならない

(36)

上林園翻經館沙門彦琮の漢訳論（齊 藤）

こと。もう一つは「八備」で提起したように、漢訳の技術論ではなく、漢訳以前に訳者が心得べき精神論であり、あるべき訳者の理想論でもあった。これは、漢訳の現場において、ただちに運用できるような実用的な法規ではなく、あくまでも漢訳者に具備されるべき資質・条件を示したもので、技術論のみを問題にしていた前後の漢訳論の中であって、異彩を放っているといえる。こうした漢訳論は、彦琮の出家前からの梵語学習や、出家者として当為の責務を果たそうとする信念などを背景（①-⑧）としていたからである。

- 1) 彦琮の漢訳論に関わる報告は、中心となる「八備」に限定されるものが多く、そこに帰着する過程や条件に及んで論じられることはない。本稿では、これらの報告とは異なり、とくに彦琮の漢訳論が成立する背景に力点をおいている。梁啓超「翻譯文学与仏典」（『梁任公近著』第1輯中卷，上海商務印書館，1923年），羅根澤「彦琮的八備說」（『中国文学批評史』上海書店出版社，2003年。原著1957年），苑芸「釈彦琮及其“八備”“十條”」（『法音』1984年第6期），曹仕邦「釈彦琮反對翻譯的理論」（『中国仏教経史論集』東初出版社，1990年），陳福康「彦琮的《弁正論》」（『中国訳学理論史稿』上海外語教育出版社，1992年），顔治強「從『弁正論』看彦琮的翻譯思想」（『中国翻譯』1994年第5期），鎌田茂雄『中国仏教史』6巻，p.336（東京大学出版会，1999年），唐麗麗「彦琮翻譯觀述評」（『岳陽職業技術学院学報』26巻4期，2010年），傅惠生「彦琮『弁証論』对我国訳論的歷史貢獻」（『中国翻譯』2011年第1期），黄小凡「再論隋釈彦琮『弁正論』的翻譯思想」（『西南民族大学学報』2011年S2期）。
- 2) 道宣が示した彦琮の漢訳部数23部100許巻と、経録などから復元できる彦琮撰の経序の総数26部109巻とは近似値を示している。おそらく道宣の言う23部100許巻とは、彦琮が訳主として手がけた部巻総数ではなく、漢訳事業に参画して、そこで経序を撰した漢訳の部巻数をもって示した数値であろう。
- 3) 昆崙書とは、現在のスマトラ島やマレー半島を中心に治めていた室利仏逝国（Śrīvijaya）の仏典を意味する。義浄も『南海寄帰内法伝』において「昆崙語」について言及しており、王邦維はこれを古代マレー語の一種であろうと述べている（『大唐西域求法高僧伝校注』p.83，中華書局，1988年）。

〈キーワード〉 彦琮，漢訳論，『弁正論』，八備

（佛教大学准教授，博士（文学））